

富小路

—平安京の路の一例—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 平安時代中期の富小路（北から）

はじめに 平安京は、延暦13年(794)に桓武天皇によって長岡京から遷都された日本古代最後の都城です。規模は東西4.5km、南北5.2kmの長方形で、広大な面積を占めていました。平安京内は、東西・南北の街路と、それによって区画された方形の街区によって構成されます。街区には、東寺・西寺、鴻臚館、東市・西市などの施設が配置され、貴族や役人には宅地が与えられました。街路はこれらをつなぎ、京内での人・モノの移動や都市機能の維持など様々な役割を担っていました。

平安京の路 平安京の街路につ

いては、『延喜式』京程条に規模・数・構造などが詳細に規定されています。それによると平安京の中心を南北にはしる朱雀大路をはじめ、規模の異なる大路・小路があり、街路は路面・側溝・大行(大走り・築地掘部の平坦面)・築地によって構成されていることが分かります。これまでの発掘調査から路面には礎敷きの有無や、様々な形態・規模の側溝が見つかっており、街路遺構は設計と施工された実態の両方が分かる面白い特徴を持っています。次に発掘調査で見つかった街路の一例について紹介していきます。

富小路の発掘調査 2020年、現在の麩屋町通四条上るで行なった発掘調査で、平安時代中期から室町時代にかけての富小路が見つかりました(写真1)。富小路は、南北方向の路で、平安京の東端である東京極大路の一筋西側に位置します。調査では、4時期の路面と6時期の側溝が見つかり、その変遷や構造を明らかにすることができました。

最も古い平安時代中期の富小路は、礎敷きで、幅4.5m、11.4m分の長さで検出しました。路は路面と路盤の2層構造で構築されています。まず、褐色シルトを薄く

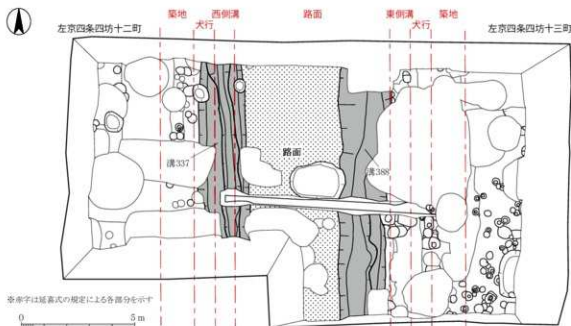


図1 平安時代中期の富小路と条坊の関係性

敷いて路盤とし、その上面の路面は2～3cm程度の礫を密に敷き詰めて固く叩き締めていました。路面に用いられた礫の大きさは均質で、材料を選別し丁寧に造られています(写真2)。また、路の断面形は、中央部が高く、両端に向かって低くなるかまぼこ形をしていました。このことは、降雨の際に雨水を側溝に流し、路面部分に水が溜らないようにするための工夫と考えられます。路面の両側に



写真2 路面の礫敷き

はそれぞれ側溝が掘られています。西側溝である溝337は、幅2m、深さ0.8m、東側溝である溝388は、最大幅2.4m、深さ0.9mと規模の大きなものであったことが分かりました。

では、実際に調査で見つかった富小路と『延喜式』に書かれている設計との関係はどのようになっているかを見ていきたいと思っています。『延喜式』によると小路の築地々間は約12m、路面幅6.9m、側溝幅0.9m、大行幅0.9m、築地幅1.5mで計画されています。今回見つかった富小路の路面幅は4.5m、側溝幅2.0～2.4mで、計画に比べると路面幅は狭く、溝は広く造られています。また、推定されている計画位置との関係を図1に示しました。これを見ると、西側は概ね合致していますが、東側は西寄りに狭くなっており、街路の幅や施工位置が計画とは異なる部分があることが明らかになりました。

おわりに なぜ富小路は、設計と異なって造られたのでしょうか。その要因の一つとして、今回見つかった最も古い富小路の整備が、平安京遷都直後から開始されたのではなく、10世紀代まで遅れることが考えられます。巖谷保胤の記した『池亭記』などから、10世紀になると平安京の右京城が衰退していき、左京の四条以北に居住城が集中するようになると考えられています。周辺の宅地化が進む中で、富小路を整備する必要があったと言えるそうです。また、多くの人々の往来に耐えうる路にするため、強固な礫敷きの路面にしたのかもしれませんが。

京内の路は、現在の道路と重なっていることが多く、部分的な確認に留まる調査が大半です。そのような中で、今回の調査は路の全体を検出し、その変遷や様相が明らかになった貴重な調査例となりました。

(鈴木康高)